



浦安音楽ホール
URAYASU CONCERT HALL

—いい音、浦安から—
浦安音楽ホール オープニングシリーズ

諏訪内晶子

浦安音楽ホール

こけら落としコンサート

浦安市・日本音楽財団 ストラディヴァリウスシリーズ Vol.1



©Yoshida

浦安音楽ホール

2017年4月14日(金)19時開演



主催：浦安市、日本音楽財団
共催：浦安音楽ホール
助成：日本財団

Program

プロコフィエフ |
ヴァイオリンとピアノのための5つのメロディ 作品35bis
S. Prokofiev Five Melodies, Op. 35bis

ベートーヴェン |
ヴァイオリン・ソナタ第5番 へ長調 作品24「春」
L.v.Beethoven Violin Sonata No. 5 in F Major, Op. 24, "Spring"

~休憩~

ベートーヴェン |
ヴァイオリン・ソナタ第6番 イ長調 作品30-1
L.v.Beethoven Violin Sonata No. 6 in A Major, Op. 30, No. 1

ファリャ(コハンスキ編曲) |
スペイン民謡組曲
Manuel de Falla (arr. P. Kochanski) Suite populaire espagnole

2017年4月14日(金)19時開演 浦安音楽ホール



曲目解説 Program Note

セルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)

ヴァイオリンとピアノのための5つのメロディ作品35bis

かぐわしい調べが浦安音楽ホールオープニングを寿ぐ。摩訶不思議な郷愁を誘う5つのメロディに抱かれる。

ロシアの歌姫ニーナ・コシェツのために1920年の秋に書いたヴォカリーズ、つまり母音だけで歌われる「5つの歌詞のない歌」を、プロコフィエフ自身が1925年にヴァイオリンとピアノに編曲した。それが心あるヴァイオリニスト必携の小品「5のメロディ」である。編曲に際し、プロコフィエフは親友のポーランド人ヴァイオリニスト、パウル・コハンスキ(パウルはパヴェウ、パヴェルとも表記される 1887~1934)からアドヴァイスを受け、彼に第1曲、第3曲、第4曲を献呈した。しかし第2曲はセシリア・ハンセンに、第5曲はヨーゼフ・シゲティに献呈というから歴史は面白い。プロコフィエフは第2曲に別のオーケストラ編曲も遺している。

なおコハンスキの名は、今夜のプログラムの最後にも登場する。

第1曲:アンダンテ

第2曲:レント、マ・ノン・トロツポ

第3曲:アニマート、マ・ノン・アレグロ

第4曲:アレグレット・レツジェーロ・エ・スケルツァンド

第5曲:アンダンテ・ノン・トロツポ

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)

ヴァイオリン・ソナタ第5番 へ長調 作品24「春」

思わずほほ緩む選曲。鍵盤の鬼才でもあったベートーヴェンが、30歳を迎えた1800年から翌年にかけて作曲した名作を聴く。

恩師の一人アントニオ・サリエリに捧げた作品12のヴァイオリン・ソナタ3曲(第1番、第2番、第3番)でこのジャンルに名乗りを挙げたベートーヴェンは、優美この上ない「春」にも斬新な筆致を添えた。

前口上なく歌い出される冒頭部の創りも、ごく短いスケルツォ楽章を交えた4楽章形式も、19世紀初頭の愛好家を驚かせたに違いない。歌謡旋律を紡ぎ、変奏に意匠を凝らしつつ、新たな二重奏に想いを寄せたベートーヴェンがここにいる。

愛称「春」の名づけ親は不明。しかしこれは完璧なネーミングと言える。

第1楽章:アレグロ

第2楽章:アダージョ・モルト・エスプレッシヴォ

第3楽章:スケルツォ、アレグロ・モルト

第4楽章:ロンド、アレグロ・マ・ノン・トロツポ

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)

ヴァイオリン・ソナタ第6番 イ長調 作品30-1

雅な響きの向こうに、ドラマ的ソナタの美学が舞う。

1801年から翌年にかけてベートーヴェンは、作品30のヴァイオリン・ソナタ3曲のほか、「テンペスト」の愛称をもつピアノ・ソナタや自作主題による変奏曲、「プロメテウスの主題による変奏曲とフーガ」、それに交響曲第2番二長調を書いた。ベートーヴェン自身の言葉を借りれば「全く新しい手法によって」「新しい道」を切り拓いたのであった。

作品30のソナタはいずれも素晴らしい。ベートーヴェン宿命の八短調で書かれた劇的な第7番(作品30-2)に関心が向きがちだが、ライフワークの変奏をフィナーレに織り込んだイ長調ソナタの味わい深さは、また格別。歌に満ちあふれた第2楽章では、魔法のような転調も聴こえてくる。曲は1803年の初夏にウィーン美術工芸社から出版され、ロシア皇帝アレクサンドル1世に捧げられた。その理由や背景は分かっていない。

第1楽章:アレグロ

第2楽章:アダージョ・モルト・エスプレッシヴォ

第3楽章:アレグレット・コン・ヴァリアツィオーニ

マヌエル・デ・ファリャ(1876~1946) [編曲]パウル・コハンスキ(1887~1934)

スペイン民謡組曲

南欧の妖艶な舞曲が、エキゾチックな楽想が浦安音楽ホールを満たす。

スペイン南部アンダルシア出身のマヌエル・デ・ファリャが1915年に紡いだ歌曲集「7つのスペイン民謡」は、歌い手ばかりでなく、歴史的なヴァイオリニスト、チェリスト、それにギタリストをも夢中にさせた。

ポーランドの名ヴァイオリニスト、パウル・コハンスキもその一人。というよりもコハンスキの編曲(全6曲)は、ファリャを大いに感激させたのだ。

ファリャの組曲には、アラブや北アフリカの民俗舞曲や、かの地独特の旋法も織り込まれている。スペインはもとより、異郷をイメージし、創造の翼を広げたコハンスキの編曲は、ほんとうに素晴らしい。弱音器を付けた響きやフラジョレット(高音の倍音を弾く奏法)の効果も抜群だ。

「ムーア人の織物」 スペイン南東部ムルシア地方の民謡に基づく。

「ナナ」 アンダルシア地方の子守唄。

「カンシオン」 カンシオンとは歌曲のこと。

「ポロ」 アンダルシア地方の烈しい哀歌。

「アストゥリアス地方の唄」 スペイン北部アストゥリアス地方の民謡に基づく。

「ホタ」 スペイン北東部アラゴン地方の舞曲。この組曲の名刺曲である。

諏訪内晶子

Akiko Suwanai (Violin)

1990年史上最年少でチャイコフスキー国際コンクール優勝。これまでに小澤征爾、マゼール、デュトワ、サヴァリッシュらの指揮で、ボストン響、フィラデルフィア管、パリ管、ベルリン・フィルなど国内外の主要オーケストラと共演。BBCプロムス、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン、ルツェルンなどの国際音楽祭にも多数出演。2012年、2015年、エリーザベト王妃国際コンクールヴァイオリン部門審査員。2012年より「国際音楽祭NIPPON」を企画制作し、同音楽祭の芸術監督を務めている。デッカより14枚のCDをリリース。

桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコース修了。文化庁芸術家在外派遣研修生としてジュリアード音楽院本科及びコロムビア大学に学んだ後、同音楽院修士課程修了。国立ベルリン芸術大学でも学んだ。

使用楽器は、日本音楽財団より貸与された1714年製作のストラディヴァリウス「ドルフィン」。



©Tamirito Yoshida

金子陽子

Yoko Kaneko (Piano)

名古屋生まれ。桐朋女子高校音楽科、同大学での研鑽を経て、1991年パリ国立高等音楽院をプルミエプリ(1等賞)でピアノ科と室内楽科を卒業。これまでジャン・ムイエル、ジェラルド・プーレ、レジス・パスキエ、グザヴィエ・フィリップス、ルノー・キャブソン、有田正広、諏訪内晶子など第一線の演奏家のパートナーを務めたほか、パリシャトレ座、ルツェルン、ルーヴル美術館など世界中の著名な音楽祭に招かれている。

鋭い感受性と楽譜の深い読み、レパートリーの奥深さ、多彩なテクニクと稀に見る音色の美しさを国際的に高く評価され、モダンピアノとフォルテピアノ両方でパリを本拠地として演奏と教育の両面において活発な活動を続けている。



©Shinichi Yokoyama

ストラディヴァリウス 1714年製ヴァイオリン「ドルフィン」 Stradivarius 1714 Violin "Dolphin"

1800年代後半にこの楽器を所有していたジョージ・ハートは、光沢の美しい裏板のニスが優美な"イルカ"を思わせることから「ドルフィン」という名前を付けた。音色並びに楽器の保存状態が優れており、1715年製「アラード」、1716年製「メシア」に並ぶ世界3大ストラディヴァリウスの1つと呼ばれている。また、巨匠ヤッシャ・ハイフェッツ(1901~1987)が愛用していたことでも知られている。

浦安市と(公財)日本音楽財団は、双方のもつ音楽資源を活用した
事業連携について協定を締結しました。

本コンサートのチケット売上げのすべては、日本音楽財団より浦安市に寄付され、
市民の文化芸術の普及と振興のために使われます。